

## TRANSITION TO HEALTH (087)

### “ 新型コロナウイルス感染 ⑬ ”

～ パンデミック・ワクチンに成功事例なし～

#### はじめに

前号では「PCR検査の不都合な真実」と題し、『無症状PCR検査陽性者』に対する「偽陽性を除外するための“確定診断の必要性”」についてお話した。12月25日現在、累積約21万人が新型コロナウイルス感染症と報告され（確定診断はされていない）、日本人の約0.2%が今までに感染したとされている。PCR検査の感度・特異度については異論のあるところであるが、北海道大学の研究グループの「Clinical Infectious Diseases誌(2020.9.25)」への発表によると、「感度=77~93%」「特異度=99.9%」（鼻咽頭粘膜採取）とある。そこで、今まさに0.2%の人が感染していると仮定して、感度・特異度を各々「93%」「99.9%」として計算すると、陽性適中率は『65.1%』となる。新型コロナ感染を疑わせる有症状者に対象を絞って検査をすれば、陽性適中率は高くなるが、無症状者にまで拡大して検査をすると、陽性適中率は次第に低下し、限りなく65%に近づいていく。日本人全員を市中感染率0.2%の時点で検査したと仮定すれば、陽性確認者100人中35人は偽陽性ということになる。偽陽性者を病院・ホテルに隔離することは「人権侵害」に当たりかねず、「病床逼迫」「医療崩壊」「倒産」「自殺」へと繋がるのではないかと危惧される。

#### ワクチン接種で不妊症？ 「ワクチンの研究中止要求」申し立て

米国ファイザー社、英国アストラゼネカ・オックスフォード大学などが開発したワクチンがEUや英国で承認され、本格的に接種が始まっている。ワクチンの安全性について、日本のメディアが伝えていない情報をここに紹介しよう。

12月1日、ヨーロッパ評議会の保健衛生委員会の委員長 Dr. Wolfgang Wodarg（ヴォルフガング・ヴォダーク博士）（ドイツ人疫学者、肺疾患と環境医学の専門家）と元・製薬会社ファイザーの副社長兼最高科学責任者 Dr. Michael Yeadon（マイケル・イードン博士）（アレルギーおよび呼吸器治療分野の専門家）が連名で、EU政府の欧州医薬品庁（EMA）に対して『全ての新型コロナワクチンの研究（第Ⅲ相臨床試験）の中止』を要求して、異議・申し立てを行なった。二人によると、米ファイザーなどが開発中の新型コロナウイルスのワクチンには Synchronin-1（シンシチン-1）と呼ばれるスパイクタンパク質が含まれており、これに対する抗体が、哺乳動物の胎盤の形成を阻害し、女性は『生涯に亘って不妊症』になってしまう危険性があると。また、『抗体依存性感染増強』を引き起こす危険性、海洋無脊椎動物由来の『生物発光物質：mNeonGreen』という



(43 ページにわたる申立書 (PDF))

抗原性不明（目的も不明）の物質が（何故か）封入されていると（ワクチン接種済認証用？・・・丸山の私見）。

## ワクチン接種の危険性・・・歴史的事実をふたたび（復習）

### ★ 1976年 副作用ギラン・バレー症候群大量発生でフォード大統領失脚

1976年2月、米国のある陸軍訓練基地内で豚インフルエンザが発生し、19歳の兵士が発症から24時間以内に死亡した。時のフォード大統領は、**緊急予防接種計画**を宣言し、10月から予防接種を開始したが、4,565万人に接種した時点で、副作用の**ギラン・バレー症候群**



(GBS)が通常の**7倍以上**の565人に発症し、重篤な**30人以上**が2か月以内に**死亡**した。また、**30人の高齢者**が予防接種後数時間以内に「**説明不可能な死**」を遂げたため、接種開始2ヶ月半ほどの12月、**中止**に追い込まれた。ワクチンの**副作用**で60人以上が死亡したという**大失敗**が原因でフォード大統領は失脚したといわれている。

### ★ 2009年新型(A/H1N1) ワクチン接種でインフルエンザ発症

2009年の新型インフルエンザ(A/H1N1:新型の豚インフルエンザ)騒動の時、ワクチンを接種した人たちの間で、インフルエンザ感染が拡大していた。海外では医療関係者による『ワクチン接種**反対運動**』が展開されたり、各国政府による『接種**禁止措置**』が採られていた。この時は、ワクチンの接種を受けた若い人・子ども達に感染が拡大し、重症化しやすかった、という現象が起こっていた。

2009年新型インフルエンザ騒動の時		
2009年7月	アメリカ	ニューヨーク州の看護師団体がワクチン接種 <b>反対</b> を表明
2009.11.02	スイス	妊婦、少年少女、老人に対するワクチン接種・許可せず。
2009.11.15	ポーランド	ワクチン接種 <b>認めず</b> 。
2010.01.04	フランス	ワクチン接種 <b>禁止</b> 。 ワクチン接種で、インフルエンザ感染が増大し、海外では、反対運動、接種禁止措置が取られたのに、 <b>日本は接種を続けた</b> 。

この「09パンデミック」の時、日本ではインフルエンザ感染による死亡が195人（通常の数千人～1万人と比べ非常に少なかった）、ワクチン接種後の**副反応死**が**131人**と報じられていた（2010年3月2日）。ワクチン接種1.7万人当たり1人が死亡していた。当時のワクチンの国家**検定基準**は？といえば、「ワクチンを30万人に接種して副反応での死亡が1人以下ならばOK」であった。ワクチンを仮に日本国民1億2,400万人に接種して副反応による死亡が**400人**までならばOK？ということになる。国の補償はともかく、誰もが400人中の1人にはなりたくない筈。

### ★ 遅発性の副反応（副作用）・・・ワクチン補助剤の危険性：湾岸戦争症候群（GWS）

アナフィラキシー・ショックやGBSだけが副反応ではない。1991年の**イラク戦争**に従事した**兵士**は、帰還後、脱毛症・疲労感・痛み・記憶障害・倦怠感や関節痛などを訴え、退役軍人の**85%**、**約2万人**が**15年以内**に死亡した。当時、この症候群は**湾岸戦争症候群**（Gulf War Syndrome）と呼ばれ、出兵前に接種された**炭疽菌ワクチン**の**補助剤**として使われた**Squalene**(スクワレン)に誘発されたと考えられた。実は**WHO**は1972年の時点ですでに、ワクチン接種で「**免疫力低下**」、免疫補助剤で「**免疫暴走**」、そして「**発癌**」「**自己免疫疾患発症**」等々についても認識していた。

### 安全なワクチンとは・・・筋注・皮下注ではなく、鼻腔噴霧式（スプレー式）では？

皮下注射・筋肉注射でできる抗体は、血流中に存在する**IgG**抗体であって、鼻咽頭粘膜で働く分泌型の**IgA**抗体ではない。したがって、鼻咽頭粘膜への感染の初期には、ワクチンで作られた抗体は『ウイルスに攻撃が全く**届かない**』もし、自己免疫力が不十分であれば『ウイルスの**増殖**』を許してしまい、重症化してしまうかもしれない。だから、インフルエンザ感染の場合、多くの医師は**NA阻害薬**などの「**抗ウイルス薬**」を処方するのである。もし、ワクチンに重症化阻止の効果があれば、「抗ウイルス薬」の処方の必要はないはずである。「24時間早く解熱する」などの説明を受けて処方された方もいるかもしれない。だが、ワクチンの接種を受けていたあなたが、「抗ウイルス薬」の処方なしで『増殖・重症化を阻止』できたとしたら、それは、あなたの本来の**自己免疫力**がしっかりと働いたからであろう。

新型コロナ感染の場合、ワクチンによる抗体がウイルスと遭遇するのは、鼻腔や咽頭・舌ではなく、肺の奥、肺炎を起こし始める直前の肺胞の毛細血管の中であろう。実際には、それより先にあなたの自己免疫力が働き始めるはずである。呼吸器感染症の細菌・ウイルスの**侵入口**は**鼻咽頭粘膜**であり、いきなり皮膚を貫いて筋肉に侵入したりはしない。したがって、ワクチンも鼻咽頭経路で接種されるのが自然ではなからうか。普段、我々は侵入する有害物質を「くしゃみ・咳・鼻水や嘔吐・下痢」などの防御反応で体外に排出しようとする。いきなり**有害物質**を**筋肉**や**皮下**に注射されたのでは排除する術がなく、**体内に蓄積**させてしまい、数年・十数年・数十年後の**遅発性の副作用**の原因となってしまうのではなからうか。今回の新型コロナワクチンのスパイク蛋白「**Syncytin-1**」の胎盤攻撃は本当なのだろうか？

### おわりに

ワクチンを保存・安定化させる**添加物質**も（?）、人体に**無害**な『**鼻腔噴霧**（スプレー）**式**』の**安全なワクチン**の開発が望まれる。